博士論文 (要約)

南京国民政府の文化外交と『中国評論週報』グループ知識人の英文執筆活動:「ロンドンにおける中国芸術国際展覧会」(1935‐36)の開催をめぐって

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻
範 麗 雅
平成 28 年 11 月 24 日

本論文は 1935 年 11 月にロンドンで開催された「中国芸術国際展覧会」を、南京国民政府が 31 年の「満洲事変」を契機としてヨーロッパを舞台に展開した文化外交の重要な一環として捉え、政府中枢機構内の欧米留学経験を持つ官僚や在外の外交官、および国内外で活躍した書画家、蒐集家、バイリンガル著述家を中心とした知識人たちが同展の準備・開催をめぐって展開した外交・文化活動について、中英両国で刊行された新聞記事・論説・著書および同展の関係者らによる報告書、書簡、回想録などを手掛かりに解明しようとしたものである。序章で提示したように、本論文の目的は、第一に「ロンドン展」の開催によってもたらされた中国芸術への学術的な関心の高まりと、それに伴う多言語で著された中国文明理解に関する著述の国際的な出版ブームにおける、温源寧や林語堂を中心とした『中国評論週報』グループの知識人たちの英文による文筆活動の実態を明らかにすることにある。その上で、林語堂、熊式一、蔣彝ら海外で活躍した中国人著述家が著した中国芸術論・文明論の英文著書が欧米の文芸界に受け入れられてベストセラーになったことと、「ロンドン展」の開催との関連性を解明する。本要約では、これまでの全 10 章によって明らかにし得たことをまとめ、残された課題を提示する。

第1節　本研究の意義

本論第 I 部で考察した通り、「ロンドン展」は一部の中国書画が適切に取り扱われなかったという事実があったにもかかわらず、全般的に成功を収めた展覧会だったと言える。そのことは、当時の英米の有力紙や東洋学の専門誌に掲載された記事や論説に見られるように、「ロンドン展」に出品された中国芸術品に対する英国人の評価が高かったことから窺える。とは言え、この展覧会が収めた最大の成果は中国芸術に対する従来の西洋人の偏見を覆したことにある。即ち 18 世紀以降の英国人に「中国的な品物」の一つとして看做されてきた中国絵画は、「ロンドン展」開催時には依然として「日本の眼」を通して鑑賞されていたにもかかわらず、それ以後は西洋の古典芸術としてのギリシャ彫刻やルネサンス期のイタリア絵画と同じく、「純芸術」 (fine art) として認められるようになったことから、同展は中国絵画に対するより深い研究が行われる転換点を作り出したと言える。そして何よりも重要なのは、同展を機に欧米では中国芸術の主流に対する新しい認識が芽生えたことであろう。それは、中国絵画の主流はこれまでフェノロサや岡倉の著述で語られ、また欧米の主要な博物館・美術館で蒐集されてきた馬遠、夏珪、梁楷、牧谿などに代表される南宋の宮廷画家や禅僧画家の作品以外にこそ存在しているという認識である。「ロンドン展」をはじめ、英国各地で開催された様々な中国絵画展或いはロンドン滞在中の中国人外交官や書画家による書画展示・講演・

講義・著述活動などを通して、英国人の中国芸術の主流に対する認識は上述の南宋期の宮廷と禅僧画家から、徐々に北宋の「四大家」、元末の「四大家」、明の「呉派」と董其昌の作品を頂点とする文人の書・山水画へと導かれるようになりつつあった。国立北平故宮博物院から出品されたこれら芸術家の作品に対する理解の高まりに伴い、同展開催前後の英語圏 (その他の言語圏も含む) では、文学・芸術・歴史など中華文明全般を紹介する書籍の出版ブームが到来した。そしてこのブームの「火付け役」として特筆すべき役割を果たしたのが、19 世紀の末頃から 20 世紀の半ばまで大英博物館に勤務した二人の英国知識人、ローレンス・ビニヨンとアーサー・ウェイリーである。彼らが 1910 年代から展開した東洋芸術文化理解の展示・著述活動は、中国芸術に対する欧米の知識人層の理解を深めたことに大きく貢献した。しかしその一方で、時代や言語、そして中国書画を取り巻く環境および彼ら自身のヨーロッパ人としてのアイデンティティーといった様々な制約により、彼らの中国理解の著述には大きな誤解や盲点も潜んでいる。とりわけ「ロンドン展」の英国組織委員会の中で中心的な役割を担ったビニヨンの著述は、この特徴を顕著に示している。20 世紀の英米文壇における代表的な詩人・劇作家・東洋芸術研究家として知られるビニヨンは、多くの場合、岡倉天心や瀧精一などの日本人美術学者による出版物、或いは英国国内外で出会った日本人書画鑑定家や芸術家との人的交流を通じて中国絵画を理解してきた。その結果、彼の中国絵画に対する理解は 1930 年代に入ってもなお日本的美意識に大きく左右されており、それは、彼が主要な組織者の一人として関わった同展の中国絵画作品の選考や展示形式にも影響を及ぼした。さらに本論第 I 部第 3 章に見てきたように、こうした「日本の眼」を通した中国絵画への理解という構図は、1930 年代の欧米の芸術界に見られる一般的な傾向でもあった。

一方、そもそも南京国民政府が「ロンドン展」の参加に応じた要因の一つは、日本の中国侵略によって国家存亡の危機に直面する中で、これまで「日本の眼」を通して西洋人に受容され、鑑賞されてきた中国芸術を世界に向かって再定義する必要性を強く意識するようになったからである。換言すれば、これまでフェノロサ、岡倉天心、瀧精一らの英文著述で語られてきた中国絵画ないし中華文明全般を、今一度中国人学者自身によって自国の芸術伝統と美的理念に基づいて再解釈することを迫られたのである。従って、当時の南京国民政府にとって何よりも重要だったのは、「ロンドン展」を通して中国芸術こそが極東芸術の源泉であることを内外にアピールし、西洋芸術が勝ち取った崇高な地位と同等に中国芸術を位置付けた上で、芸術品を媒介として欧米諸国の国民の称讃と支持を得ることであった。この政府の思惑は、例えば、英国赴任中の初代駐英大使郭泰祺と南京国民政府からロンドンに派遣された特別代表である鄭天錫らによる外交活動に映し出されており、また英国側が主催した昼食会や晩餐会における彼らの講演からも汲み取れる。そして、同様

の思惑は「満洲事変」以降に孫科や蔡元培が陣頭に立って展開した文化外交の活動に見られ、彼らに協力した温源寧、呉経熊、林語堂を中心とした『中国評論週報』グループの知識人たちの英語による文筆活動からも、こうした政府の意図を汲んだ動向が明確に浮かび上がってくる。

以上の背景を視野に入れ、本論の第 II 部と第 III 部では、郭泰祺、鄭天錫らによる英国での外交活動と国内外で活躍した中国知識人の文筆活動を取り上げて論じた。具体的には、これまであまり取り上げられることのなかった温源寧、呉経熊、林語堂、姚克らの中国古典詩歌・書画・戯曲論の代表的なテキストに光を当てて分析を行った。日本が 1910 年代後半からヨーロッパを舞台に自国文化の優越性と独自性を訴える宣伝活動を繰り広げた中で、温、呉、林、姚らは、郭と鄭の英国での外交活動との歩みを揃え、欧米人の中国文化理解に多大な影響を与えた日本人学者の著述活動を意識しつつも、中国悠久の歴史と芸術伝統によって培われた美的理念に立脚して、古典書画・詩文・戯曲などの側面から、欧米に向けて中華文明の新たな解釈を「発信」しようと努めた。そうした試みの一つが、温、呉、林らは英文『天下』を創刊し、既存の『中国評論週報』と合わせて両誌において中国文化紹介の文筆活動を行うことだった。彼らが両誌を中心に国内外の英文雑誌に発表した夥しい論説や書評では、海外で活躍した熊式一や蔣彝といった中国人著述家の文筆活動を国内外の英語読者層に紹介すると同時に、ビニヨンやウェイリーに代表される欧米知識人の中国理解の著述活動も積極的に取り上げて高く評価している。また、その一方でビニヨンやウェイリーらの著述の背後に潜む盲点や誤った中国理解を指摘し、批判も行った。こうして温、呉、林、姚らの活躍により、『天下』は 1930 年代の中国で学術性と一般性を兼ね備えた国際文化公共空間を創出した。それによって、東西の学術界と文化界の交流はこれまでにない密度で行われるようになり、同誌で文筆を展開した多国籍の知識人たちは互いの芸術と文化をより深く観察する視野も獲得するようになった。しかし、何よりも重要なのは、『天下』と同誌で活躍した温、呉、林、姚らの文筆活動が明末清初以降、宣教師・外交官・新聞記者などの西洋人著述家に独占されてきた「中学西漸」(中国文化の西洋への伝播)の局面を打ち破り、また 1910 年代以降のフェノロサ、岡倉、瀧らの英文著述で説かれた「中国文明像」を修正したということであった。それ故、『天下』は、『字林西報』や『アジア』など、国内外の多くの英文雑誌に大きく注目された[1]。パール・バックは『アジア』の書評欄で『天下』を紹介した際に、「『天下』は東洋の文化遺産を分かち合いたいと願う英語圏のあらゆる人々に読まれるべきである」[2]などと述べ、東西文学・文化交流史における同誌の役割を高く

---

[1] この点について，以下の『天下』の号数のバック頁を参照。*T'ien Hsia Monthy*, 1935/9; 1935/10; 1935/11; 1935/12; 1936/1, 1936/4.

[2] Pearl S. Buck, "*T'ien Hsia Monthly*," *Asia*, 1935/9, p. 550.

評価している。

『天下』で活躍したバイリンガル著述家の中でも、林語堂の貢献は傑出していた。林は大学時代から英文による編集・執筆活動を始めたが、「ロンドン展」の開催は彼のバイリンガル著述家としての人生に大きな転換点をもたらした。林は、『天下』の編集者仲間や後輩にあたる熊式一や蔣彝らの英文著述活動から刺激を受けながら、「ロンドン展」を機に『吾国与吾民』という比較文明論の著述を以て英語圏の文壇でのデビューを果した。1936 年 8 月には渡米し、30 年間に及ぶ海外生活の中で、『生活の芸術』を筆頭に数多くの英文著述を出版し、欧米の知識人読者層の関心を唐宋期の芸術文学から明末清初の芸術文学文および明清文人の趣味生活へと導いて、その理解の深化を促した。言い換えれば、林は論説・劇・小説の創作や古典漢詩・漢文・明清の通俗小説・古典書画論の英訳などを通して、「ロンドン展」のビジュアルのみでは伝えることができなかった中華文明の全体像を文字で提示することに成功したのである。それは、本論第 7 章、第 9 章、第 10 章で取り上げた欧米の有力紙および東洋学の専門誌に掲載された数多くの書評によって証明されている。こうした点を鑑みると、渡米前の林の英文執筆活動は必ずしも自発的なものとは言えず、熊や蔣のロンドンでの活躍と温や呉らの国内での文筆活動とともに、「満洲事変」以降に南京国民政府が官民一体となって、「ロンドン展」を通して目指した欧米における正しい中国理解或いは中国文化理解を推進するという、国際政治と外交の文脈の中で理解されるべきである。このように、本研究は一見すると関係性が薄く見える 1930 年代の東西文化交流史における二つの大きな出来事、すなわち「ロンドン展」の開催と英文『天下』月刊の創刊との関連性を、同誌で活躍した温源寧、呉経熊、林語堂、姚克ら自身による言説から見出して結び付けることで、彼らを英文による中国文明理解の執筆活動に向かわせた時代背景の重層性を浮かび上がらせた。そして、彼らの英文テキストに対する分析を加えることにより、本論文は中国美術史、日中・欧米の芸術交流史、国際文化外交などという複眼的な視点を通して、近現代中国の対外文化交流史上における一重要な側面を明らかにした。本研究の意義ならびに独自性も具体的に以下の 5 点に集約されている。

(1) 本研究は国際展覧会史、中国理解をめぐる東西芸術文化交流史、近現代中国の芸術史・展覧会史・学芸史などにおける重要な意味を持つ「ロンドン展」を初めて総合的に考察した。

(2) これまで中国語圏・日本語圏・英語圏で行われてきた美術史、近現代中国英文メディア史などの研究における空白点を埋め合わせることができた。従来の中日或いは中英の芸術交流史に関する研究は近現代中国芸術に与えた (時には日本を通した) 西洋の影響に焦

点をあてたものが多い。本研究は 20 世紀初頭の欧米における中国古典書画の受容と、その受容をめぐって西洋で教育を受けた一部の近代中国知識人が自ら英文雑誌を創刊し、中国芸術文化を積極的に国際社会に発信しようとした史実に着目した。そして彼らの文筆活動に対する検証を通して、これまで近現代中国英文メディア史研究ではあまり取り上げられてこなかった中国人の書き手による英字新聞での活躍の実相を明らかにした。

(3) 本論文で提示した未公刊の史料により、「ロンドン展」の開催に際して、中・日・英の外務官僚が極めて重要な役割を果たしたことが明らかになった。芸術史関連の研究では従来注目されることのない彼らを、近代中日・日英・中英の文化外交を考える上で避けることのできない存在まで高めたことで、1930 年代の南京国民政府の対日・対英外交の研究に新しい光をあてた。

(4) 中日両国の日本研究に新しい視点を提示した。これまでの中日比較文学・文化研究は日本に留学した近代中国知識人による、日本或いは日本人学者を経由した政治・教育・法律・美学・文学といった、所謂「西洋文化」の受容が、いかに中国の近代化に貢献したのかを論じるというテーマが主流であった。本研究はそれらとは異なる視点から、明治維新によっていち早く西洋文化の洗礼を受けて知的に成熟し、コスモポリタン的視野を獲得した日本人学者が自国の伝統文化を西洋に向けて発信することにより、20 世紀の欧米知識人の中国も含む東洋文化全般に対する理解を深めることに大きく貢献したという点に目を凝らし、その実相を明らかにした。

(5) 本研究は古代から近代に至るまで、戦争による略奪行為ではなく、貿易や人的交流を頼りに、日本に将来された「古渡」、「新渡」と呼ばれる中国絵画群について、中日両国の異なる美意識や文化伝統によって、異なる評価を受けた歴史背景と現況を明らかにした。これによって、今後、多国間にまたがる有形・無形の文化財・文化遺産の研究にも新しい視点を提示した。

第2節 残された課題

前述したように、現時点では南京国民政府期の対日・対英外交の政策や「ロンドン展」の開催に関するすべての史料はまだ未公開であるため、本研究では初代駐英大使の郭泰祺が同展の開催の実現に至るまでに王世杰を中心とした南京国民政府の中枢機構とやり取りした際の詳細な動向を解明できていない部分がある。このことに加えて、筆者の語学力の制限もあり、本論文の考察対

象は主に古典・現代の中国語と日本語、および英語で書かれた文献に限定され、「ロンドン展」に重要な展示品を出品した当時のフランス政府やドイツ政府の思惑或いはこれら国々の東洋学者や蒐集家たちの同展に対する姿勢や考えをフランス語やドイツ語の文献を通して分析することができなかった。これらは筆者の今後の課題としたい。さらに本論文の紙幅の制約から取り上げることができなった課題も数多く残されている。その主要なものを挙げると、次の 2 点である。

(1) 1930 年代の日中関係の重層性と複雑性。近年の歴史学は近代ナショナリズムを背景とした敵／味方、協力／抵抗、支配／服従、愛国／売国などの二分法的な歴史認識の行き詰まりをいかに克服するかを喫緊な課題としている。特に帝国主義支配に抵抗する民族解放運動やファシズム支配に抵抗する運動という既存の枠組みに収まりきらない占領地・植民地における複雑な政治空間と政治過程を考察する歴史学の新たな方法が求められている。「満洲事変」以降の日中関係はまさにこうした多角的な視座から研究されるべき分野である。というのも、1937 年 7 月 7 日の「盧溝橋事件」を機に日中が全面戦争に踏み込み、本格的な戦闘が始まる以前に、両国はヨーロッパを舞台に「火花のない」文化外交の闘いを既に繰り広げていた。そうしたなかで日中両国は政治的に対立関係にあった一方で、実際には文化的に学術的に協力関係にもあったからなのである。例えば、日本の貴族政治家や財閥蒐集家が「ロンドン展」に自らの所有する貴重な芸術品を出品したことからも窺えるように、「満洲事変」以降の日本政府内における対中姿勢が必ずしも一枚岩ではなかったのは確かである。このように 1930 年代の日中関係は実に様々なイデオロギーに基づく文化表象や政治的な思惑が錯綜しながら複雑な様相を呈していた。本論文は英国政府が中国と敵対関係を持つ日本を「ロンドン展」の重要な参加国として誘致する動きに触れた。しかし、英国の外務省は当時日本側とのやり取りのすべての文書を「極秘」として取り扱っていたため、日英両国の動向を駐英大使の郭泰祺や南京国民政府がどの程度まで把握しており、またどのように対応していたのかという点については、関係史料が乏しいことから、まだ解明に至らなかった。今後、新たな史料を発掘することによってこの問題をさらに深く掘り下げていきたいと考える。

(2) 西洋人の中国芸術文化理解において日本人学者が果たした役割の全体像。これまでの日中芸術文化交流に関する研究は、古代にせよ、近現代にせよ、たとえ古代朝鮮や近代西洋を媒介にしても、文化的な同質性の強い日本と中国両国間の受容関係を中心に考察する傾向があったが、20 世紀初期の欧米知識人の中国芸術理解において日本人美術史

学者の果たした、異文化・異言語圏への東洋文化を発信するという役割は殆ど注目されることがなかった。しかし、少なくとも多くの欧米人が中国芸術品の蒐集家・研究者となる以前に浮世絵を始めとする日本美術品の蒐集家・研究者であったということから、19 世紀後半のヨーロッパを風靡したジャポニスム、および岡倉、フェノロサの英文著述と田島志一、大村西崖、瀧精一らの編集による日英両言語による大型美術叢書や雑誌などの出版が、西洋芸術の文脈における中国芸術を理解する下地を作っていたことは明らかである。この点は「ロンドン展」の「外国人委員会」に数多くの日本人学者や芸術家が名前を連ねていることからも窺える。このことは、同展の主催国である英国が 19 世紀末頃から西洋での中国芸術の理解を促進し深化することに大きく貢献した日本人学者たちを高く評価していたことを反映していると言える。本論文はビニヨンやウェイリーの中国芸術文化理解に大きな影響を与えた岡倉天心、瀧精一、中村不折、青木正児らの英語と日本語による著述を取り上げて分析した。しかし、紙幅の制限から同じく西洋人の中国芸術観に強い影響を及ぼした浜田耕作、梅原末治、原田淑人および貴族蒐集家の細川護立や住友寛一 らによる中国の仏像彫刻や古代青銅器の蒐集・研究については論じることができなかった。管見では、浜田、梅原、原田、関野、細川、住友諸氏の蒐集・研究活動は、欧米人学者のみならず中国人学者に対しても清末の考証学・金石学を基礎とする中国芸術史から、西洋の近代考古学を土台とする新しい中国芸術史が構築されていった 1930 年代において、中国学術史の再編を促すための大きな知的刺激を与えたのではないかと考える[3)]。今後、多言語・多領域を横断する文化的ポリティクスの視座から、これらの問題を究明することが期待される。

---

3) 例えば，桑兵は以下の著書で，「国立北京大学考古学会」(馬衡が代表を務める) と日本の「東亜考古学会」(1925 年に原田と浜田によって設立) との連合組織である「東方考古学協会」の人員構成や，馬衡，浜田，原田などの日中考古学者たちによる中国での考古発掘調査活動について詳細に論じた。しかし，彼らの研究活動は 1930 年代に欧米人の考古学者や東洋芸術研究者に影響を与えたことについては触れていない。本論第 I 部第 3 章で明かしたように，ビニヨン，ホブソン，ラファエルらが 1929 年 8 月に訪日途中で，わざわざ当時日本の植民地となった韓国や中国の旧満州に足を運び，日本人考古学者が発掘調査を行った現場を見学した。その背後には，原田と浜田を中心とした「東方考古学協会」の働きがあったことを否定できない。これについての究明は，筆者の今後の研究課題としたい。桑兵著『晩清民国的国学研究』(晩清民国学術体系統) 上海古籍出版社, 2001 年, 114-35 頁。